

高齢者の余暇活動について

一質的手法の試みによる高齢者の類型化と

レクリエーション支援方法の確立に向けての事例研究(4) —

○山崎律子、上野 幸、高橋和敏(余暇問題研究所)

キーワード：高齢者、レクリエーション支援、レジャー・レクリエーション研究
質的研究方法

はじめに

研究の背景：本研究は、過去 6 年間にわたる本研究者らの関連継続研究(「高齢者施設におけるレクリエーション活動とその問題点」第 27 回大会発表：レジャー・レクリエーション研究 37 号：1997、「高齢者デイサービスにおけるプログラミングの問題点」第 28 回大会発表：レジャー・レクリエーション研究 39 号：1998、「高齢者 A 氏 B 氏の余暇活動について—高齢者における余暇活動の類型化と高齢者に対するレクリエーション介入方法に向けての事例研究(1)」第 29 回大会発表：レジャー・レクリエーション研究 41 号：1999、「高齢者 C 氏・D 氏の余暇活動について—高齢者における類型化と高齢者に対するレクリエーション援助方法の確立に向けての事例研究(2)」第 30 回大会発表：レジャー・レクリエーション研究 43 号：2000、「高齢者の余暇活動について—高齢者における類型化と高齢者に対するレクリエーション援助方法の確立に向けての事例研究(3)」第 31 回大会発表：レジャー・レクリエーション研究 46 号：2001)の一環である。

本研究は、本研究者らが高齢者の健康体操グループや高齢者施設およびデイサービス・センターにおける身体運動支援の専門家として関わる過程において、レクリエーション視点からの支援の必要性を実感し続けたことが研究動機となった。さらに実際支援に当たっては、高齢者の多様性とともに関心状態の変化に対する対応の必要、換言すると人間の機微を見極める洞察力とその機微に答え得る対応力が重要ではないかと考えるに至った。それには従来から行われている量的手法のみでは答え得ないと、改めてその研究方法を模索するようになった。したがって現在のところ、古典的手法とされる面接法を採用した。**本研究の意義：**質的手法(主に面接など)意義についてまず説明を試みたい。現実の人間対人間の機微に関わる営みは、いわゆる科学的手法による量的判断に全く依存されとは限らない。すなわち、いかなる高度な科学的手法によっても、その研究に限度があり、最終的には理と共に人間そのものの勘と感性を働かせた素朴な手法に依存せざるを得ないのが実情である。したがって、質的手法の採用は、高齢者レジャー・レクリエーション支援研究において重要な手法のひとつとすべきであろう。アンケート調査は多量の対象を分類するには有効であるが、80 歳以上の高齢者の回答はほとんど期待できない。この点、面接調査は、80 歳以上でも可能である。かつ生の声と感情を察知できるメリットもある。**本研究方法の限界：**面接手法は、対象数が比較的少ない。よって、ある程度の偏りが生じる危険性がある。時間がかかることも難点である。また面接者によって、その感じ方の相違が想定される。より有効な方法は量的手法と質的手法の併用である。量的手法の採用による一般的傾向の把握と共に、よりきめ細かな面接によって人間の機微に関する事象を把握することが、高齢者レクリエーション支援においても、最も期待されることと考えられる。

対象と方法

対象：1) J氏(男性) 2) K氏(男性) 3) L氏(女性) 4) M氏(男性) 5) N氏(男性)

面接日：平成14年6月～8月

面接者：山崎律子、上野 幸

結果

< J氏の場合 >

年齢：86歳 大正5(1916)年生まれ 性別：男性 出生地：東京都

人生経歴：東京、赤坂に生まれる。小学校1年の時、鵠沼の別荘にて関東大震災に遭いそのまま鵠沼に住む。小学校3年から富山県の親戚宅へ移る。中学校3年で東京にもどり、早稲田中学・高校へ進む。20歳から本格的に絵を学び始める。昭和12(1937)年、早稲田大学へ進学。昭和14(1939)年23歳の時、銀行へ就職。昭和17(1942)年、27歳で見合結婚する。昭和19(1944)年、29歳、日立製作所に再就職(清水工場)し軍需産業に従事。昭和20(1945)年の7月、教育召集が来て、金沢で軍事訓練を受ける。昭和24(1949)年、33歳の時、鉄鋼部に異動(のちの日立金属)。昭和51(1976)年、60歳の時、部長職で退職。定年前から個展を開き、一水会賞他多数受賞。自宅で教室を始める。平成2(1990)年、74歳で軽い脳梗塞になり、休養するが、平成6(1994)年、78歳頃から絵画活動を再開し、現在も継続している。

< K氏の場合 >

年齢：82歳 大正9(1920)年生まれ 性別：男性 出生地：東京都

人生経歴：大正9(1920)年、長男で東京、神田に生まれ、小学校1年まで神田に住む。大正12(1923)年、中目黒に移る。昭和8(1933)年、攻玉舎中学にすすむ。昭和12年(1937)、17歳の時、陸軍士官学校に入る。航空兵の訓練に入る。昭和15(1940)年、20歳で卒業後、操縦等の訓練を受け、満州の飛行隊づきとなる。昭和16(1941)年、21歳の時、熊谷、能代で戦闘機訓練を受け、満州にもどる。同年8月インドシナ半島、フィリピンなどの攻撃に加わる。昭和18(1943)年帰国し、少年飛行兵の教育訓練にあたる昭和20(1945)年、25歳の時、九州太刀洗で終戦を迎える。戦後は戦友と配給物の運搬の仕事をして、昭和23(1948)年、戦友の紹介で電機会社に就職する。昭和40年頃から景気がよくなり、昭和48(1973)年、53歳の時、貿易会社を渋谷に設立し、常務に就任。昭和58(1983)年、63歳で定年退職。退職後も監査役を10年勤める。現在は、八日市会の会長、自分史を書き始めるなどの活動を実施している。

< L氏の場合 >

年齢：80歳 大正11(1922)年生まれ 性別：女性 出生地：栃木県足利市

人生経歴：大正11(1922)年、栃木県足利市に生まれ、20歳まで住む。昭和17年見合結婚し、上京する。姑と同居。和裁やろうけつ染めの教室に通う。昭和19(1944)年夫の転勤で静岡県清水市へ移る。艦砲射撃や空襲にあう。昭和24年(1949)、東京渋谷の社員寮に移り、その後3～4年毎に都内を移動。昭和34年(1959)年調布に自宅を建て、住む。昭和52年(1977)年、新舞踊を始める。現在も、老人クラブと新舞踊のサークルに所属。赤十字奉仕団にも所属し、和裁、刺繍、ろうけつ染めなどを30年以上継続している。新舞踊の発表用の衣装縫いを引き受けている。教師とし

て真面目に生きていた父親を尊敬している。

< M氏の場合 >

年齢：64歳 昭和13(1938)年生まれ 性別：男性 出生地：東京都八王子市
 人生経歴：昭和13(1938)年八王子市に3男として生まれる。父は開業医。昭和20(1945)年6月、小学校1年で、青梅の叔父宅へ疎開する。8月1日疎開先から八王子大空襲を見た。昭和20(1947)年、小学校4年で八王子へ戻る。昭和25(1950)年、中学へ入学。臨海学校へ行き塾を出し、2ヶ月間休む。昭和28(1953)年、慶応高校入学。昭和31(1956)年、慶応大学経済学部に入學。昭和35(1960)年、損害保険会社に就職。昭和41(1966)年、28歳の時、北海道へ転勤。現地のスキークラブに入る。昭和42(1967)年、29歳で結婚。肝炎で入院。昭和46(1971)年、新宿支社にもどり、係長となる。昭和50(1975)年、広島支店長で転勤。1年目は単身でいき2年目から妻と移る。昭和54(1979)年、首都圏 副本部長に昇進。その後本部長になる。平成4(1992)年、55歳の時に関連会社の取締役となり常務になるまでの6年間を勤める。平成10年(1998)年、61歳の6月に定年退職。現在は、月1～2回の仕事と囲碁や手話、パソコンを習い、体操教室や水泳など多様な活動を継続している。

< N氏の場合 >

年齢：65歳 昭和12(1937)年生まれ 性別：男性 出生地：広島県
 人生経歴：昭和12(1937)年、二男で、広島県に生まれる。昭和20(1945)年、小学校2年の時に、被爆する。昭和22年(1947)年、小学校4年の時、父が亡くなる。53歳であった。県内で疎開する。昭和31(1956)年、高校を卒業。昭和30(1955)年、19歳の時に母が亡くなる。昭和32(1957)年、東京都立大学の人文学部に入學。寮に入る。アルバイトをしながら、裁判所の速記部養成研修所に入る。大学を休学する。昭和34(1959)年、裁判所をやめ、都立大学に戻る。昭和37(1962)年、石油会社に入社。広島県の製油所に転勤。昭和40(1965)年、職場結婚。昭和45(1970)年、組合や総務、勤労などの部署を経て、財務に異動。昭和48(1973)年、本社に戻り、練馬区に住む。昭和58(1983)年、アメリカや中国への出張に数回出る。平成10(1998)年、監査役員として、61歳で退職。現在は、会社のOB会事務局を引き受け、会報発行などを実施。旅行がてら登山をしたり、体操教室、ロータリークラブなど多様な活動を続けている。

表1：これまで(1999～2001)の面接者一覧

	性別	生年	年齢(02現在)	面接時年齢	出生地
A氏	男性	昭和3年	74歳	71歳	北海道
B氏	女性	昭和2年	75歳	72歳	東京都
C氏	男性	昭和7年	70歳	68歳	東京都
D氏	女性	大正15年	76歳	74歳	東京都
E氏	男性	昭和6年	71歳	69歳	台湾
F氏	女性	昭和8年	69歳	68歳	九州
G氏	男性	昭和9年	68歳	67歳	愛媛県
H氏	女性	昭和10年	67歳	66歳	東京都
I氏	男性	昭和11年	66歳	65歳	東京都

考 察

以上今回の面接結果と過去の面接者9名の結果を併合して要約したい。これらの結果から読み取れる特徴は、以下のとおりである。

1. 80歳以上の世代特徴・大正時代の生誕、男性は第2次世界大戦時に軍役年齢、女性は挺身隊年齢／既婚者は婦人会年齢。戦時中はある者は前線で戦い、ある者は国内で軍役に服し、またある者は空爆を受けた。すべてが戦争体験者である。戦後、退職までは会社あるいは家庭のために努力してきた。総じて戦争を盲目的に受け入れるのではなく、その世の中に生きてきた事実を認めている。現在は、自分のしたいことがはっきりしており、自分の役割を持つ内容で実施している。
2. 60歳代後半～70歳代の世代特徴・昭和初期の生誕、幼少から軍大国主義への道の最中に育つ。男性は第2次世界大戦には未軍役・志願軍役年齢、女性は挺身隊年齢／疎開年齢。すべてが10歳後半までの戦争体験者である。大戦終了と同時に青年期を迎えて教育の大転換に心の真空状態に見舞われた。潜在的に滅私奉公の精神が肌に染み付いたまま余暇活動も〇〇のためになどの目的を立てる傾向が強い。
3. 60歳代前半・幼児期に第2次世界大戦を経験。戦後の民主的教育の中で、いろいろな事を経験し、周囲の人間関係の中から自分の生き方に影響を受けている。ゴルフ・マージャン・スキーはもちろん経験している。現在は、まだ働くことへの意欲もあり、余暇活動はいろいろな事へチャレンジしている。

以上各世代の特徴を把握するにしたがい、国の全体的雰囲気と第2次世界大戦が大きく影響を与えていることがわかった。その特徴がコホート（後述）概念による分類が摘要され得る感触を得た。

まとめと今後の課題

以上今回の面接および過去、14名の面接を実施してきた結果をまとめてみたい。一連の面接実施過程においては、その研究方法、分類、支援方法などに関する新たな知見を見出すに至った。

すなわち、本面接法は、あえて言えば、回想法と客観的面接法との中間的・自由会話的な特徴を有し、まとめと分析に労力を必用とするが、微妙な心的状態を察知し得ることができる。これは、横断的質問紙法による量的処理では十分把握することができないものとして、今後本面接法を活用する可能性を有すると期待される。

高齢者の分類に関しては、同世代、同経験などを有する人が共通した価値意識による類似した信条を持つなど、いわゆるコホート（COHORT）概念に合致する結果が得られた。余暇活動への志向も、コホートごとにそれぞれ特徴があった。

したがって、高齢者へのレクリエーション支援方法は、コホート概念による分類を基調として、個人的経験による個人的特性を重視しながら逐行することが妥当であるとの中間的結論に達した。

本研究の限界にも挙げたように、本研究方法は、時間的な難点、人的難点などがあるが、今後の実践的レクリエーション支援においては、これらの難点を克服し、より精密な検討を行ない、発展させていくことが課題である。